様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２３３９

研究課題名（和文）アンドレ・ブルトンにおける「ポエム＝オブジェ」の詩学とその射程

研究課題名（英文）Poetics of "Poem-Object" and their range in Andre Breton

研究代表者
前之園　望（Maenosono, Nozomu）

中央大学・文学部・准教授

研究者番号：２０７８４３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アンドレ・ブルトン（1896～1966）が1930年代半ばから実践する、詩的言語と日用品を同一平面上で組み合わせるポエム＝オブジェ作品に固有の特性を分析し、その実践がブルトンの詩学の変遷の中でいかに重要な役割を担っていたかを明らかにした。
　1930年代半ば、ブルトンは詩的言語で物質世界に干渉し新たな詩的現実を出現させる特殊な詩的描写の可能性を模索する。ポエム＝オブジェの誕生はちょうどこの時期に重なり、ポエム＝オブジェの実践は、その詩的描写を深化させるための実験の場だったのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　アンドレ・ブルトンは20世紀前半に世界的に展開されたシュルレアリスム運動の中心人物であり、彼の活動の基盤となる詩学には同時代の文学・芸術に通底する一側面が凝縮されている。本研究は、ブルトンがポエム＝オブジェの制作を通してプロジェクションマッピング的感性に基づく詩的描写の詩法を深めていたことを実証的に示す。これは21世紀的な感性が20世紀半ばに詩の領域で誕生していた、つまりは現代的感性が技術に先行して文学の領域で発生していたということである。AIの深化、メタバースの展開など、技術面の発展ばかりが注目される現代において、技術と感性の関係性を再検討する契機となりうる視点を本研究は提供している。

研究成果の概要（英文）：　This study analyzes the characteristics inherent in Andre Breton's (1896-1966) practice from the mid-1930s of combining poetic language and everyday objects on the same plane in his poem-object works, and reveals how this practice played an important role in the evolution of Breton's poetics.
　In the mid-1930s, Breton explored the possibility of a special kind of poetic description in which poetic language interferes with the material world to create a new poetic reality. The birth of Poem-Object coincided with this period, and the practice of Poem-Object was a site of experimentation to deepen that poetic description.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：アンドレ・ブルトン　シュルレアリスム　ポエム＝オブジェ　フランス20世紀詩　プロジェクションマッピング　詩的描写

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

シュルレアリスム運動の領袖、フランス作家のアンドレ・ブルトンは、1930 年代半ばから、日用品と詩的言語を同一の支持体の上に配置する立体作品を制作し始め、1942 年にはこうした作品群を「ポエム=オブジェ」と名付けた。ポエム=オブジェの特徴は、詩的言語が作品内の造形的要素を説明せず、またその逆も同様な点である。つまり、ポエム=オブジェにおいて、両者の間にはイラストともキャプションとも異なる関係が生じているのである。純粋な言語空間、あるいは純粋な絵画空間とは程遠いこのポエム=オブジェは、ブルトン独自の詩学が 1930 年代に過渡的にたどり着いた地点であった。

ポエム=オブジェ固有の特性はこれまで明らかにされてこなかった。というのもポエム=オブジェは、シュルレアリスムにおいて言語がイメージと切り結ぶ複雑な関係を巨視的観点から考察するための足掛かりとして研究されるか、あるいはブルトンが繰り返し主張する夢起源のオブジェの制作―欲望の物質化―というテーマの延長線上に位置する問題として扱われることが多いからである。しかし、過去に見た夢を現実空間内に再現しようとする夢起源のオブジェと、既存の日用品が詩的言説との相乗効果で新たな有機的生を得るポエム=オブジェとでは、それぞれ性質が全く異なる。なにより、ポエム=オブジェの真の射程は、一般論ではなくブルトンの個人史の中で考察することで初めて明確になる、という考えが本研究の出発点であった。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の 2 点に集約される。

（１）ブルトンによるポエム=オブジェ作品に固有の詩学とその射程を明らかにすること。

（２）ポエム=オブジェをブルトンの詩学の変遷の中に位置づけること。

ブルトンには、なにか新しいことを思いついた際に、例えそれがまだ漠然としたものであっても、そのアイデアの射程を測るためにまず小規模な実験を行う傾向がある。その結果、ブルトンの世界観は同時期の彼の詩学の影響を強く受けることとなり、その影響力は結果として彼の活動全般にまで及ぶ。ポエム=オブジェもやはり当時予感された新しい詩法の実験なのであり、『狂気の愛』（1937）や『秘法 17』（1944・1947）の中にその新たな詩法の適用例を確認することができる。それは〈詩的描写〉とでも名付けられるものであり、あたかも対象の描写を行っているかのようでありながら、実際は詩的言説を用いて物質的現実を流動化し、客観化された―すなわち共有可能な状態に置かれた詩的現実をその物質的現実に投影することで現実そのものに変形を加える詩法である。ポエム=オブジェに見られるブルトン独自の〈詩的描写〉―詩的言説で物質的現実に干渉し、詩的現実を物質空間内に出現させる詩法―の特徴を個別の作品分析を通して検証し、ブルトンの詩学の中に位置づけることが本研究の目的であった。

３．研究の方法

先行研究を参照しつつ、それぞれのポエム=オブジェ作品において詩的言語と造形的要素との間に機能している力学を分析し、そこからブルトン固有の詩法を抽出した。分析のサンプル数を可能な限り増やし、時系列に沿った詩法の変遷とその中でもぶれることなく一貫している軸とを明らかにすることで、ポエム=オブジェの詩学を総合的に解明し、その詩学がブルトンの活動全体にいかに反映されているかを検証した。研究成果は、紀要・学会誌への投稿を通じて公開した。

４．研究成果

初年度である 2018 年度は、ブルトンの詩法の特性とオブジェ観を明らかにしたうえで、ブルトンにおけるポエム=オブジェの実践がブルトン独自の詩的描写を前提とするものであるという本研究の軸となる仮説を実証的に検討した。

ブルトンの詩法に関する研究としては発表「シラサギが飛び立つまで――アンドレ・ブルトンにおける《aigrette》」（慶應義塾大学教養研究センター後援シンポジウム「鳥たちのフランス文学」、慶應義塾大学、2018 年 11 月 25 日）を行い、ブルトンの詩作品の分析には彼の詩法の変遷への目配りが不可欠であることを明らかにした。また、ブルトンのオブジェ観を間接的に探る研究として、シュルレアリスムの造形芸術の問題系を取り上げた以下の発表を行った。「ジャック・エロルドと透明な巨人」（シュルレアリスム美術を考える会、第 2 回ワークショップ「シュルレアリスム美術を読む」、成城大学、2019 年 3 月 6 日）。

ポエム=オブジェそのものの研究としては、前年度日本フランス語フランス文学会で口頭発表した内容をブラッシュアップした論文「潜在的現実の現働化――アンドレ・ブルトンにおけるポエム = オブジェの詩学」（『フランス語フランス文学研究』第 113 号、日本フランス語フランス文学会、2018 年 8 月、445-459 頁）を発表した。また国際シンポジウム「詩人たちの映画」で以下の発表を行い、ポエム=オブジェの詩学とプロジェクションマッピングの比較を行った。「La

poetique du *mapping video* verbal: le cas d'*Arcane 17* d'Andre Breton」(東京大学フランス語フランス文学研究室、国際シンポジウム「Le Cinema des Poetes 」、東京大学、2018 年 12 月 15 日)。

2019 年度は、前年度に研究を行ったブルトンにおける詩的描写の特性を言語化するために、ポエム=オブジェの詩学と禅の世界観との比較を行った。ポエム=オブジェの制作を通じてブルトンが深化させた特殊な詩的描写には、ある対象を慣習的認識から切り離し、視覚的諸要素を抽象化してその対象に固有の輪郭線を浮かび上がらせ、任意のイメージが投影できる流動的な支持体へと変えるという特性がある。ブルトンの表現を借りれば、詩的言語を通過させることで対象を一連の「潜在状態」へと戻すのである。この世界観は、奇妙に「禅」における世界観に呼応する。ポエム=オブジェの詩学も禅の世界観も共通して、通常の社会生活が営まれる世界を慣習によって制度化された硬直した世界とみなし、そこから解放されることを目指す。しかし、禅においては制度化された世界観から解放された直接的対象認識を恒常化させることが目指される一方で、ポエム=オブジェの詩学においては、認識対象を制度的現実から切り離し、むき出しの現実である「潜在状態」へと戻したのちに、そこへ任意のイメージを投影し、言わば新たな制度化を引き起こすことが目指される。ただし、その故意の制度化を不動のものとして現実を硬直させるのではなく、逆に無数の制度化の可能性を導入することで、現実の流動性を担保するのである。制度化された世界からの逸脱は、瞬間的には達成できても、持続することは本質的に困難である。なぜなら、ある状態が持続するとき、多かれ少なかれその状態の制度化は避けられないからである。禅はそれでも敢えてその困難に立ち向かい、ポエム=オブジェは無数の制度化の可能性を導入することで個別の制度化の必然性自体を希薄にするのである。ブルトンと禅との関係に関する研究は本研究の主軸ではないが、今後様々なアプローチが考えられるテーマである。

2020 年度は、ポエム=オブジェ制作の実験を通して得られた知見をブルトンが自らの作家活動にフィードバックし、その結果得られた新たな詩法の射程を別のポエム=オブジェ制作を通して計測していることを実証的に分析し、ポエム=オブジェの実践がブルトンの詩学の変遷において重要な役割を果たしてることを明らかにした。

2018 年度には「潜在的現実の現働化――アンドレ・ブルトンにおけるポエム = オブジェの詩学」において、初期のポエム=オブジェ作品において方向づけられた詩学の特性が後年のブルトンの散文作品において十全に開花していることを明らかにした。本年度は、この出発点と暫定的到達点とをつなぐ詩学の変遷を詳細に確認した。1935 年のポエム=オブジェで得られた詩的描写の原理は『狂気の愛』(1937)で明文化され、現実世界に介入するブルトンの詩的言語は新境地に達する。その成果が 1937 年 1 月 17 日・18 日に制作されたポエム=オブジェで発揮されているのである。この二作品はポエム=オブジェ作品としては非常に珍しい「連作」と考えられ、その特徴は、どちらの作品もそれぞれ二通りの読み方ができる、いやむしろ二通りに読むように鑑賞者が誘われているという点である。文字領域と物質領域の精緻な分析から、1 月 17 日・18 日それぞれのポエム=オブジェ作品が、詩集『水の空気』(1934)の世界、『狂気の愛』の世界の二つの世界を〈同時に〉体現していることが明らかになった。1935 年の時点では物質的現実の上に投影される詩的現実はひとつだけだったが、1937 年では同一作品の上に複数の詩的現実を投影することが可能となった。『秘法 17』(1945・1947)においては、ロシェ・ペルセの岩場の上に複数の詩的現実が立ち上がるが、そのためには 1937 年のポエム=オブジェにおける試行錯誤が不可欠だったのである。以上の研究成果を論文にまとめ、学内紀要に投稿した。(「アイスランドスパーの詩学 : アンドレ・ブルトンの連作ポエム=オブジェ」『人文研紀要』第 99 号、中央大学人文科学研究所、2021、365-398 ページ。)

2021 年度は、これまでブルトンによるポエム=オブジェとみなされてきた「凍てつく大洋」(1936)の写真について詳細な分析を行い、撮影されている作品の支持体となったタバコの箱のメーカーを特定した。この発見をもとに、社会文化史的視座から、この写真がブルトンの制作したポエム=オブジェ作品の単なる「記録写真」ではなく、マン・レイの演出のもとに撮影された「アンチ=ポスター」としての性格が強いことを明らかにした。以上の研究成果を論文にまとめ、学内紀要に投稿した。(「《 L'Ocean glacial 》: poeme-objet ou affiche surrealiste ?」)この論文は『人文研紀要』第 103 号(中央大学人文科学研究所、2022)への掲載が決定している(現在初校校正中)。

また、1950 年代以降のポエム=オブジェ作品をどうとらえるべきか検討した。1940 年代までのポエム=オブジェにおいては、当初独立・並列していた文字領域と物質領域が、時間の経過とともに細分化され、次第に混ざり合い、相互浸透を起こすという傾向があった。しかし、50 年代以降のポエム=オブジェにおいては、文字領域が極端に縮小され、こうした相互影響関係は希薄になる。そこで、本研究では、50 年代にブルトンにおいて「クラチュロス的転換」とでも呼ぶべき詩学の変化があったという仮説をたて、検証を行った。二つの現実(言葉)を衝突させる詩法から、ある現実(言葉)の中には、二つ(以上)の現実がすでに含まれており、それを抽出するという詩法への転換である。この詩学は、50 年代に実践される詩的集団遊戯「互いにの中に」の本質でもあり、両者は車の両輪のような関係にあったということが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Nozomu MAENOSONO	４．巻 54
２．論文標題 La poetique du mapping video verbal : le cas d ’ Arcane 17 d ’ Andre Breton	５．発行年 2020年
３．雑誌名 仏語仏文学研究	６．最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00080157	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 前之園 望	４．巻 113
２．論文標題 潜在的現実の現働化	５．発行年 2018年
３．雑誌名 フランス語フランス文学研究	６．最初と最後の頁 445-459
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/ellf.113.0_445	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 前之園望	４．巻 99
２．論文標題 アイスランドスパーの詩学 ： アンドレ・ブルトンの連作ポエム=オブジェ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文研紀要	６．最初と最後の頁 365-398
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 前之園望
２．発表標題 シラサギが飛び立つまで――アンドレ・ブルトンにおける 《aigrette》
３．学会等名 慶應義塾大学教養研究センター後援シンポジウム「鳥たちのフランス文学」（慶應義塾大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前之園望
２．発表標題 La poetique du mapping video verbal: le cas d’Arcane 17 d’Andre Breton
３．学会等名 東京大学フランス語フランス文学研究室、国際シンポジウム「Le Cinema des Poetes 」（東京大学）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前之園望
２．発表標題 ジャック・エロルドと透明な巨人
３．学会等名 シュルレアリスム美術を考える会、第2回ワークショップ「シュルレアリスム美術を読む」（成城大学）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 秋山伸子、有田英也、上杉誠、岡元麻理恵、笠間直穂子、片木智年、三枝大修、澤田直、志々見剛、鈴木哲平、鈴木雅生、滝沢明子、田口亜紀、谷本道昭、中条省平、塚本昌則、中野知律、野崎歓、博多かおる、平岡敦、福田美雪、堀江敏幸、前之園望、水野尚、宮下志朗、安田百合絵、横山安由美、吉村和明	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 372
３．書名 フランス文学を旅する60章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関